

# 木曾に蘇った浦島太郎

## 鳥居フミ子

### はじめに

舞鶴市教育委員会所蔵の糸井文庫に古浄瑠璃「浦島太郎」がある。挿絵や装幀などから元禄頃刊行の江戸板と推定される絵入り六段本である。巻末が落丁なので全貌は分からないが、六段めの冒頭までが残っているので、大体的内容を知ることができる。<sup>注1</sup>

この「浦島太郎」は、木曾の、中山道の宿場上松<sup>あけまつ</sup>が舞台となっている。

浦島説話は、文献の上では、その淵源を奈良時代に遡ることができるが、中世以降全国的に流布し、香川県庄内半島一帯や横浜市神奈川区浦島丘にも伝説や遺跡が語り伝えられている。海に囲まれた島国に浦島説話と同類の話が併立的に発生し、また、有名になった浦島伝説が同類の話を補足するような形で普及していったこともあったであろう。

ともあれ、浦島説話は海岸を舞台として展開するのが原型であろう。古浄瑠璃「浦島太郎」のように、浦島太郎は木曾の山中で生まれ、木曾の川のほとりで釣をして暮らしていたとするのは、浦島説話としては極めて特殊で、奇異の感さえ与える。なぜこのような古浄瑠璃が作られたのであろうか。そこには木曾にとび火した浦島説話と、その説話をもとにして生まれた文芸作品との微妙な関係がうかがえるように思われる。

古浄瑠璃「浦島太郎」のあらすじは次のようである。

### 初段

雄略天皇の御代、信濃国上松の住人浦嶋左衛門夫婦は末を托すべき子のないことを悲しんで戸隠大明神に参籠し、玉の中から竜が現れて天上する夢を見る。

浦嶋左衛門の館に夢とかが訪れ、夫婦の見た夢は吉夢で、寿命長久の子が生まれるであろうと告げる。御台は懐妊し、男子が誕生する。その子は浦嶋太郎と名づけられる。

浦嶋太郎は二十一歳に成人する。才智発明限りなく、常に川辺に立って釣糸を垂れているので、里人は恵比寿の再来と言って畏れている。

## 二たんめ

うんのの将監ともたかの姫君、玉より姫は戸隠大明神の申し子で十六歳、三国無双の美人であった。

ある時、玉より姫が戸隠山に詣でて桜の木蔭に幕を引いて鶯を愛でてしていると望月太夫もとかげが現れて鶯を奪ってしまう。姫は鶯を返してくれるようにもとかげに頼む。もとかげは姫の願いを頑として聞き入れず、かえって姫を威嚇する。

浦嶋太郎は戸隠山に詣でて、この場にきかかると、姫は鶯をとり返してほしいと浦嶋に頼む。もとかげは浦嶋と聞いて、仕方なく鶯をさし出す。望月の郎等は浦嶋にきつてかかる。浦嶋と、姫に従ううんのの侍は望月の郎等と戦い、戦闘となるが、板垣・へんみらが駆けつけて両軍を和談させる。

## 三たんめ

玉より姫は浦嶋を恋い、浦嶋の住んでいる上松をさしてあこ

がれ出る。荒れた庵に一人淋しく過していた浦嶋は玉より姫との再会を喜ぶ。姫は人目をしのいで浦嶋の庵にかくれる。

ともたか夫婦は姫君を探す。上松の土民が、浦嶋の庵に姫君がしのんでいると告げるので、ともたかは浦嶋の館をとりまき、浦嶋を捕える。

浦嶋の父は事の次第を一条殿に告げる。一条殿は岩原藤太を使にさしむけ、浦嶋を獄屋より出させる。浦嶋は危い命を助けられ、引きこもる。

玉より姫は庵に浦嶋を尋ねてくるが浦嶋がいないので悲しみ、指を食い切り、その血で白い小袖に辞世の歌を書き、伊奈川に身投げをする。

浦嶋は釣をしようとしてきかかり、玉より姫とも知らずに、身投げした女性が沈むのを見て嘆く。身投げした女性は亀の甲に乗って波間にかくれる。

浦嶋は玉より姫の小袖の歌をみて姫が入水したことを知り、形見の小袖を持って庵へ帰る。

## 四たんめ

玉より姫は亀に案内されて竜宮海の館に着き、亀のさし出すうろこの衣を着てきんなら王にまみえ、とうなんくわ女と名づけられ、東の海に出てあさくらふのつとめをするように命ぜら

れる。姫は衣を着て亀の姿に変身し、伊奈川の波にうかれていく。る。

或る日、釣をしていた浦嶋は釣針にかかって苦しんでいる玉より姫の変身した亀を波間に放してやる。亀は水面に現れて浦嶋に声をかけるが浦嶋には通じない。姫が嘆いていると案内の亀が現れて、着ている衣を脱げばもとの姿になると教える。姫は、もとの人間の姿にかえり、釣舟に棹さして浦嶋に近づき、玉より姫であると告げる。

浦嶋は玉より姫の舟に乗り、その舟が万劫も朽ちることのないとうなんくわ女の釣舟と聞き、釣舟を蓬萊山にたとえて喜ぶ。

五たんめ

浦嶋は玉より姫に伴われて海にわけ入り、竜宮に至る。

竜宮の四季の殿の有様は光り輝くばかりであった(四季の節事)。

六たんめ

信濃国上松に残された浦嶋の父母と玉より姫の父母は、年老いても子たちもどってこないことを嘆き悲しんでいる。山伏が忽然と現れ、浦嶋太郎と玉より姫は竜宮に暮らしている、二人に托されたこの桃を食べて長生きすれば再会できるだろう、と言って、三千年に一度みのるといふ西方の園の桃を投げ出す。

浦嶋と姫の両親たちはこの桃を食べ、七百余年生き長らえる。

浦嶋と玉より姫夫婦は故郷に帰りたいたいと竜宮のきんなら王に申し出る。夫婦は、故郷へ帰る土産に玉手箱を貰い、亀に乗って日本をさして帰る。(以下欠)

古浄瑠璃「浦嶋太郎」の浦嶋は、木曾の上松に生まれ、上松の近くで木曾川に流れ込む伊奈川のほとりに庵を結んで釣をして暮らす閑人ということになっている。浦嶋説話の舞台となっていた丹後の国とは、父の出生地ということに関連づけている。父は丹後の生まれで北面の侍であったが勅勘を蒙って信濃に流されたというのである。浦嶋太郎の父母は、子のないことを悲しんで戸隠大明神に子宝を授かるように祈るが、同時に、故郷丹後の切戸の文珠にも祈っている。

この浄瑠璃は浦嶋太郎と玉より姫との恋物語が主軸になっている。浦嶋太郎も玉より姫も、ともに戸隠大明神の申し子として生まれたという設定である。浦嶋に恋する玉より姫は浦嶋との仲を裂かれ、悲嘆のあまり入水自殺し、亀に導かれて竜宮に赴く。玉より姫は亀の姿に変身して竜宮のつとめをしていたが、浦嶋の釣針にかかって助けられたあと、もとの人間の姿にもどって浦嶋を竜宮に導き、夫婦の契りを結ぶというのである。玉より姫が亀に

導かれて竜宮へ行くことや、浦島が釣り上げた亀を助けてやり、その亀がもとの玉より姫の姿にもどって浦島を竜宮につれていくことになっている点などに亀の報恩談の変形された残影を認めることができる。

さらに、この浄瑠璃の内容上の顕著な特徴は、各所に不老不死を願う長寿思想が強調されていることである。浦島の玉手箱は長生不老の呪力を籠めたもので、浦島説話は古代の呪力信仰のうかがえる説話であるとする見方は古くからあるが、古浄瑠璃「浦嶋太郎」には浦島太郎その人に長寿の願望が托されている。浦島は戸隠大明神の申し子で、浦島自身が長寿を約束された人物であり、同時にまた周囲の人々に長寿をもたらしてくれる人物なのである。古浄瑠璃「浦嶋太郎」は何故このような大きな変容を示すことになったのであろうか。次に、その要因について考えてみたいと思う。

## 二

古浄瑠璃「浦嶋太郎」の舞台が木曾の上松にされたのは、中山道上松宿のほずれにある寢覚の床に浦島太郎が住んでいたという伝承が江戸の地にもたらされて浄瑠璃作者の興味をひいたためであったかと思われる。

中山道は江戸時代のはじめ、寛永年間に江戸と京を結ぶ主要街道として整備され、人々が頻繁に往来するようになった。上松あたりの木曾川沿いの中山道は両側に山が迫り、下流の須原宿のあたりで伊奈川が木曾川に流れこみ、この伊奈川にかかっていた釣橋は木曾谷第一番の大橋といわれて有名であった。<sup>注3</sup>上松の上流には歌枕で知られた木曾の棧<sup>かはし</sup>がある。上松宿と須原宿の間にある寢覚の床は、奇岩の間を木曾川が流れる景勝の地で、その景観は中山道随一と言われていた。

寢覚の床には浦島太郎が釣糸を垂れたと伝えられる釣舟岩があり、臨川寺には浦島太郎が玉手箱を開いて白髪となった姿をうつしたという姿見の池が残っており、祠には浦島太郎が竜宮から持ち帰った弁才天が祀ってある。<sup>注4</sup>これらの事物やそれにまつわる話は、寢覚の床に杖を休める旅人の興味を強くひいたであろう。中山道を旅した文人の旅行記や詩文に、寢覚の床で浦島太郎を偲んで作った文章や詩などを数多く見ることができる。

寢覚の床に竜宮から帰った浦島が釣糸を垂れていたという伝承はおそらく中世の頃から里人の間で言われていたのであろう。これにふれたものを文献の上で探り得るのは江戸時代に入ってからである。知られているところでは、沢庵和尚の「木曾路紀行」<sup>注5</sup>が最も古いようである。

沢庵和尚は寛永六年（一六二九）、世にいわゆる紫衣事件で幕府と抗争して羽州上山に流され、同九年赦されて江戸に滞在し、同十一年に中山道を経て帰洛した。『木曾路紀行』はその折の旅中の記録である。木曾福島宿から上松宿に昼頃着いた沢庵は、里人に案内されて寢覚の床を訪れ、木曾川が巨大な岩を削って流れる光景を見て深く心をうたれたらしく、その様子を詳しく記し、偈と和歌をよんでいる。沢庵は、里人が寢覚の床に案内してくれ、岩石につけられた名前を教えてくださいましたことを次のように記している。

寢覚床、あやしき男、山道のほとりにいて、此処のあなひ申さん、我にしたがひていらせ給へとて、さきだちける、あとにつきて、谷へくだりければ、木曾川の流のなかに、盤石のひろき床あり、土のうるほひもなき処に、古木のちよみたる松ともあまた生いて、岩のはさまくを水めぐり、色々様々の風情をつくして作りたりとも、かくはあらし。むかふは大山木あをくむらたちて、水にやうつろいけん、水又木々をやそむ、浦島がつり石など云かすかさねあけたるたよみ石、獅子石船石など様々の石の名はをしへける。在家をば見かへの里といふ心、奇石怪岩、山光水色の間ありて、詩にも歌にももつづく心はさらになし。<sup>注6</sup>

沢庵のこの文によって、寛永十一年の頃、すでに寢覚の床に「浦島がつり石」と呼ばれる石のあったことが知られるのである。この岩を眺めながら、寢覚の床に横たわる巨岩の一つに浦島太郎が釣糸を垂れていたという話が里人によって沢庵に語られたに相違あるまい。

寢覚の床で浦島が釣をしていたという伝承は、貝原益軒の『木曾路之記（岐蘇路之記）』にも見えている。『木曾路之記』は益軒が貞享二年に中山道を江戸から西へ上る時の見聞を記したものである。<sup>注8</sup>益軒は上松宿より須原宿にむかう途中、寢覚の茶屋より二町程西の臨川寺から寢覚の床を眺めている。益軒はその様子を茶屋よりわき二町程西へ行て、臨川寺といふ禅寺あり。其うしろに浦島がつりせし寢覚の床あり。寺よりみゆる岩間をつたひてねざめの床にくだる道あり。其道はなはださかし。と記している。「浦島がつりせし寢覚の床」という筆致には、その頃、寢覚の床で浦島が釣をしていたという伝承が有名になっていたことがうかがえる。

益軒は寢覚の床の奇岩を細かく描写し、およそ此地他所のすぐれたる風景にもこえて、奇妙なる風景なり。いつくしく潔事、心にしるしがたく、ことばにもなべがたし。

と感嘆の言葉を述べ、さらにつづけて、浦島のごとは「日本紀」、  
雄略帝紀、並に扶桑略記に見え」ているが、寢覚の床にきたこ

とは見えていないので、寢覚の床で浦島が釣をしたという言い伝  
えは「信じがたし」としている。

寢覚の床を訪れた益軒が、後世の人のためにと、「寢覚の床に  
釣りせし浦島」についての考証をしているのである。やはり、聞  
き流すことのできない巷説として益軒の心を捕えたのであろう。

浦島が寢覚の床で釣をしていたという伝承は室鳩巢の詩にも詠  
まれている。『鳩巢文集』に次のような詩がある。<sup>注10</sup>

寢覚牀二首 世傳浦島子嘗釣于此有石如釣臺俗呼寢覺牀

浦嶋仙翁去不<sub>レ</sub>回昔年嘗<sub>レ</sub>釣此山隈兩頭

翠壁雙雙出九曲寒流杳杳來古木長生

懸<sub>二</sub>薛荔<sub>一</sub>間<sub>二</sub>雲不斷<sub>レ</sub>護<sub>二</sub>莓苔<sub>一</sub>經過遍處無<sub>二</sub>人<sub>一</sub>

迹<sub>一</sub>獨有<sub>二</sub>風波<sub>一</sub>上<sub>二</sub>釣臺<sub>一</sub> 注11

古淨瑠璃「浦嶋太郎」は、中山道を通行した人々によって江戸  
の地にもたらされた寢覚の床に釣する浦島太郎の伝承が淨瑠璃作  
者の興味をひいて作られたものと考えて間違いないであろう。寢  
覚の床の岩上に釣糸を垂れて暮らしていたという浦島太郎のイメ  
ージがこの淨瑠璃の発端となっているのである。

### 三

長野県木曾郡上松町寢覚の臨川寺には浦島太郎の後日譚が『寢  
覚浦嶋寺略縁起』によって語り伝えられている。<sup>注12</sup>

『寢覚浦嶋寺略縁起』の内容は次のようである。

丹後国竹野郡浦嶋の領主浦島太郎は釣り上げた亀を助け、  
美女にいざなわれて竜宮に至り、玉手箱と弁才天像と万宝神  
書を貰って帰り、神書を読んで飛行の術や長寿延年の薬法を  
会得して諸国を遍歴した。木曾へ来て寢覚の床の風光が気に  
入り、ここに住みついて、釣を楽しんで暮らしていたが、あ  
る時、里人に竜宮の話をして玉手箱をあけると忽ち三百歳の  
老人となってしまう。浦島は驚いて側の池に姿をうつして  
見た。その池を姿見の池と言ひ伝え、浦島は里人に靈薬を売  
っていたので「見かへりの翁」と呼ばれたが、天慶元年の春  
に何処ともなく立ち去った。

里人はあとに残された弁才天像を祠に祀り、寺を建て、寢  
覚山臨川寺と号した。

『寢覚浦嶋寺略縁起』は多くの版を重ねている。中山道を通行  
する旅人の需要に応えたのであろう。その板行の年代は現在のと

ころ、嘉永元年を遡らないようである。

『寢覚浦嶋寺略縁起』に記されている浦嶋説話は何時頃から語られていたのであろうか。略縁起が流布するのは江戸時代後期と  
言われていることから考えれば、<sup>注13</sup>『寢覚浦嶋寺略縁起』の流行も  
嘉永年代以後とするのが適當かもしれない。しかし、すでに江戸  
時代初頭の旅人が、寢覚の床を一望に収める崖の上に建つこの寺<sup>注14</sup>  
から、奇岩を眺め、浦島の釣石に感興を催していたことは、前述  
の紀行文などによっても明らかである。『寢覚浦嶋寺略縁起』の  
内容は近世初頭から語りつがれていたと解しても差し支えないで  
あろう。

浦島が釣を楽しんだという伝承に、さらに浦島の残した竜宮の  
弁才天の話が加わって、『寢覚浦嶋寺略縁起』の浦嶋説話は著し  
く膨張している。古浄瑠璃「浦嶋太郎」では竜宮から帰る浦島が  
玉手箱を貰うところまでで切れていて、『寢覚浦嶋寺略縁起』に  
語られているような弁才天を貰ってきたかどうかは不明である。  
『寢覚浦嶋寺略縁起』では、白髪となった浦島が里人に靈薬を  
売り、「見かへりの翁」と呼ばれていたとしている。浦島と「見  
かへりの翁」とを同一人物としている点は注目すべきである。こ  
の件については後述することにする。

#### 四

古浄瑠璃「浦嶋太郎」には不老長寿の思想が顕著に見えている。  
それは、まず初段にあらわれている。

浦嶋左衛門夫婦は戸隠大明神に参籠して子を授かるように祈る  
が、玉の中から竜が現れて天上するという夢を見たので悲しんで  
いると、夢とときがきて、その夢は吉夢であると告げる。そして、  
次のように言う。

あらめてたや、御子たん生有てあるならば、じゆめう長久は  
かりなく、一天になをあらはし、なかくきろくにのこるへし

(読点は筆者。以下同じ)

神に祈って授かった申し子は、人力以上の不思議な力を持って生  
まれてくるのが常である。<sup>注15</sup>戸隠大明神の申し子として生まれる浦  
島太郎は、無限の長寿を保つことが約束されているのである。

また、四たんめでは次のような場面がある。

玉より姫が亀に導かれて竜宮へ行くと、竜宮のきんなら王は玉  
より姫にむかって

いかに女ほう、いままいりの事なれば、御なをかへて、とう  
なんくは女めづとなつくるぞ、此かいのならいにて、いのちめつ  
する事はなし、明日よりひかしの海に立いて、其日にあたる

あざくらぶを<sup>つとむ</sup>へし

という。玉より姫は投身自殺をして竜宮へきたのであったが、竜宮において永遠に滅することのない生命を得たのである。生命あるものは不滅であることが竜宮海の習いであるというのである。

六たんめの冒頭では、我が子の帰らぬことを嘆いている浦島太郎と玉より姫の親たちの前に山伏が現れて西王母の桃をもたらす場面がある。その桃は竜宮の浦島と玉より姫が山伏に托して親たちに届けたのであった。浄瑠璃では、浦島と姫の両親たちは、この桃を食べて七百余年の長寿を保つことになっている。

竜宮から帰った浦島と玉より姫は故郷の上松でどのように暮したか、この浄瑠璃の結末は落丁なので知るすべはないが、「死することなし」と予言された戸隠大明神の申し子浦島は、永遠の生命を保つことになったのではなからうか。『寢覚浦嶋寺略縁起』は、玉手箱をあけて老人となった浦島は、釣石の上に弁才天を置いて何処ともなく立ち去ったと語っている。何処ともなく立ち去った浦島は今も何処かの水辺で釣糸を垂れて悠々と暮しているであろう。浄瑠璃の結末もこれと同じように無限に生き続ける生命への夢を残しつつ終っていたのではなからうか。

このように古浄瑠璃「浦嶋太郎」に延命長寿の思想が顕著にみられるのは、浦島説話そのものに潜在する本来的な思想が顕在化

した結果とも解することができるであろう。浦島が竜宮城で過した三年がこの世の三百年に相当していたことは、裏返せば竜宮を訪れた浦島の長寿を語ることもつながることになる。しかし、故郷に帰った浦島が落胆のあまり玉手箱をあけて昇天し、浦島大明神となったという御伽草子「浦島太郎」の結末は、浦島の長寿を語るよりは老いへの恐怖を印象づけているように思われる。

## 五

木曾の上松を舞台とする古浄瑠璃「浦嶋太郎」が不老長寿の思想を前面に押し出しているのは、謡曲「寢覚」に扱われている三返の翁の伝承が作用しているように思われる。

謡曲「寢覚」は作者未詳であるが、下間少進法印の天正十六年より慶長二十年までの二十七年間の能の留帳によれば、文禄三年に一度、慶長元年に一度、慶長十九年に一度の上演が認められる。<sup>注16</sup>「寢覚」は協能物として能の上演の際の初番に置かれ、近世初頭には広く親しまれていた演目と考えられる。

その内容は次のようである。

延喜の帝の朝臣が、信濃国寢覚の里に三返の翁という者がいて長寿の薬を人々に与えているという噂があるからみてくるとの宣言をいただいた、寢覚の床にやってくる。



夜半になって現れた三返の翁は、医王仏の化現と名乗り、舞樂を奏し、寿命めでたき薬を勅使に奉る。

曲中では、三返の翁は忽然と寢覚の床に現れ、千年を送るうちに寿命めでたき薬を服して三度若返ったので三返の翁と名づけたと説明されている。

このような謡曲「寢覚」に扱われた三返の翁の話は、中山道を往来する旅人の心を強くとらえたようである。貝原益軒の『木曾路之記』にも三返の翁について言及されている。益軒は、三返の翁の話は巷説として有名であるが、浦島太郎の話とともに、「慥なる書に見えざれば、二ながら信じがたし。」としている。

謡曲「寢覚」で、寢覚の床に住んでいたとされた三返の翁は、すでに、元禄を迎える頃には、浦島太郎と同一人物のように言われるようになっていたらしい。大淀三千風の『日本行脚文集』（元禄三年奥書）には次のようにある。

○寢覚床　ころは貞享、寅うそぶく風の跡とふ、かの桜月  
ちりかいくもる、ねざめの床の朝霞、不染やむべき筆の色か  
は。抑。雄略の大昔、丹後の浦島太郎左、五色波の下津界、  
竜王の娘に心を寄せ、お亀といひし閨を唆かし、旨金釣を舐  
させ、終に入婿となり、比目の枕をかはし、一睡七百年の寢  
覚して、再世を見かへりの翁となり、霜の眉、蓬の髭を捻り、

仍孫のうからやからを離て、むかし手馴の業とて、筐の箱より、青紫の糸をとり出し、黄色の気を餌とし、釣をたのしみたる隠居所なり。

丹後の浦島太郎が竜王の女の婿となり、七百年を経て後、「見かへりの翁」となって、寢覚の床で釣を楽しんで暮らしていたというのである。ここでは、明らかに浦島太郎と三返の翁とが同一人物とされている。

『寢覚浦嶋寺略縁起』にも、玉手箱をあけて三百歳の老翁となった浦島太郎が、里人に霊薬を売って「見かへりの翁」と呼ばれたとされていることは前にも述べた通りである。『寢覚浦嶋寺略縁起』でも三返の翁と浦島太郎が同一人物に扱われているのである。

三返の翁は、弘治の頃、寢覚の床に隠栖し、山で薬を採って人に施していた人物で、河越三喜のことであろうとも言われている。『雍州府志』（黒川道祐著　貞享元年序）には、河越三喜は明国に渡り、東垣丹溪之術を学んで十二年の後帰朝し、医術によって人々を救ったとある。河越三喜と三返の翁とを同一人物とするには時代的に無理があるようだが、漢方の医術によって深山の妙薬を与えた老翁が木曾の山奥に住んでいて、有名になったこともあったのであろう。時代は下るが、『信濃奇区一覽』卷之四の「寢覚

「牀」の項に

臨川寺の庭よりみおろす木曾川の汀にて兩岸ともに屏風を立

たることし(略)俗に浦島か古跡と云は三帰翁といふ者此所

にて魚を釣て菜みけるを浦島太郎と緯名あだなす

とある。寢覚の床で釣糸を垂れていた三帰翁を、里人が浦島太郎

とあだ名で呼んだというのである。木曾路を旅する人々にとって、

深山の靈薬は限りない尊崇を集めたのであろう。

三返の翁に浦島太郎が重ねられたとき、不老長寿の思想はまぎ

れもないものとなる。古浄瑠璃「浦島太郎」は、浦島の長寿を語

る物語として、浦島を木曾の地に蘇らせたのである。

### おわりに

浦島が木曾の寢覚の床に住んでいたという伝承が何時頃から言

われるようになったかはさだかではないが、少くとも古浄瑠璃

「浦島太郎」が作られる以前に有名な話となっていたことは確か

である。中山道を旅した人々によって、浦島太郎が寢覚の床で釣

をしていたという話が江戸にもたらされ、浦島を木曾の上松の人

とする浄瑠璃が作られたのである。

謡曲「寢覚」によって室町時代以来人々の関心を集めていた寢

覚の床の三返の翁の伝承は、浦島太郎に重ねられて、浦島太郎を

不老長寿の人とした。古浄瑠璃「浦島太郎」の世界はこのようにして出来上ったのである。

中世の御伽草子「浦島太郎」によって浦島説話に付加された亀

の報恩談は、古浄瑠璃「浦島太郎」では極めて稀薄となっている。

亀が登場して姫を竜宮に導くが、それは報恩のためではない。浦

島が釣針にかかった亀を助けてやる場面はあるが、その亀は浦島

に恋する玉より姫の変身である。姫に、人間にもどる方法を教え

る亀は、姫を竜宮に案内した亀で、浦島に恩を受けた亀ではない。

亀の報恩談は形をかえて残ってはいるが、動物の報恩という思想

は極めて稀薄である。

古浄瑠璃「浦島太郎」の筋の展開は、浦島太郎と玉より姫の恋

愛談が中心になっている。浦島に積極的に近づいていく玉より姫

を描き、姫をとり返そうとする父親と浦島との闘争場面も見せ場

になっている。浦島太郎の伝承によりながら、元禄情調をただよ

わせる恋愛談を展開してみせているのである。

古浄瑠璃「浦島太郎」には、伝承をもとにして古浄瑠璃が製作

される場合の一つの典型が示されているように思われる。

### 注

注1 巻末に土佐浄瑠璃「三代四天王」の結末二丁が補綴されており、

その本文末には元禄七年の刊記がある。拙稿「中世説話と古浄瑠璃—古浄瑠璃『浦嶋太郎』の場合—」(『実践文学』第五号 昭和49年2月)、拙稿「翻刻 古浄瑠璃『浦嶋太郎』」(『近世文学論叢』明治書院 平成4年 所収) 参照。  
高木敏雄『日本神話伝説の研究』(岡書院 大正14年)  
『家忠日記』慶長五年三月九日の条に次のようにある。  
去々年ヨリ信州木曾ノ棧朽損ノ往来ノ通路自由ナラス同ク伊奈ノ河橋モ破損ニ及フ間両所ノ橋此春奉行ニ命ノ補続セラル

また、時代は下るが、瀬下敬忠著『千曲之真砂』(宝暦三年成る)には伊奈川にかかる橋について、次のように記されている。此所(須原駅)は元禄のはしめ道崩れて、昔の道と替る也、左の方よりいな川と云ふ大河流れ出て、木曾川に出る、はね橋木曾一番の大橋三はねにて二十六間、広き九尺欄干なり大石垣のかゝり此辺に類なし、

(新編信濃史料叢書9『落原拾葉』上巻 長野上伊那郡教育委員会 昭和50年 による。)

注4 臨川寺蔵『寢覚浦嶋寺略縁起』(宝暦六年改板本)に挿入されている絵図には、浦嶋太郎に關係する名所として、臨川寺の境内に「姿見の池」「弁才天」、寢覚の床に「つり舟岩」「文珠浦島堂」、臨川寺対岸の床山の麓に「浦島社」が記載されている。これらが何時頃から名所とされるようになったかはさだかでない。

注5 天正元年(一五七三)生まれ、正保二年(一六四五)没す。  
注6 沢庵和尚全集刊行会編『沢庵和尚全集』巻三(巧芸社 昭和4年)による。

注7 寛永七年(一六三〇)生まれ、正徳四年(一七〇四)没す。  
注8 『木曾路之記』の版行は宝永六年。益軒会編纂『益軒全集』巻之七(益軒全集刊行会部 明治44年)所収。引用本文はこの全集による。

注9 万治元年(一六五八)生まれ、享保九年(一六三四)没す。  
注10 室鳩巢は寛文十二年、十四歳の春、加賀侯に召されて『大学章句』を講じて讃嘆され、京師に遊学の機を得た。その後、二十三、四歳まで加州と、京と、江戸との三箇所を往来して勉学に励んだと伝えられている。正徳元年(一七一)には新井白石の推薦で幕府の儒員に登庸されている。この詩は鳩巢何歳の作か不明であるが、おそらく、加賀、京、江戸を往来して勉学していた頃、すなわち延宝年間(一六七三—一六八〇)に、中山道を通った折の作であろう。

注11 『鳩巢文集(鳩巢先生文集)』は前編宝暦十一年刊、後編同十三年刊、補遺同十二年刊。引用の本文は『近世儒家文集集成』第十三卷(ペリかん社 平成3年)による。

注12 矢代和夫・宮本瑞夫・志村有弘編『略縁起集』(宮本記念財団資料文庫1平成2年)に嘉永元年改板本が翻刻されている。同書の矢代和夫氏の解説によれば、『寢覚浦嶋寺略縁起』には嘉永元年改板本の他に、宝暦六年改板本、文化十三年改板本、無刊記本などがあり、その内容はほとんど同じである。嘉永元年改板本が現存のものでは最も古いようである。臨川寺には宝暦六年改板本が所蔵されている。臨川寺住職見浦宗山氏の談では、それは近隣の檀家の改築の際に家具の中から出てきたものである。『寢覚浦嶋寺略縁起』は何度も改板を重ね、近隣の人々や旅人に配布されたり売られたりしたのである。

注13 注12掲出書所収の『寢覚浦嶋寺略縁起』解説(矢代和夫)。  
注14 木曾文化財関係者の会資料『木曾寢覚之床 臨川寺拾遺』(昭和54年6月)によれば、臨川寺の創建年代は不詳。中興開基は寛永元年(一六二四)で、境内六千余坪、本堂・庫裡・方丈・玄関・書院・鐘楼・開山堂・弁天堂・経蔵・有功門・静観亭・望床齋などの建物があつて、すこぶる壮麗であつたが、江戸時代末期、文久三年(一八六三)に境内尽く灰尽に帰し、その後の再建によって現在に至っている、とある。臨川寺は江戸時代初期より栄えていた寺で、日光例幣使の小憩所として、また国主の茶席ともされて著名であつたということである。

注15 藤原秀隆「申し子譚の形成」(『金沢工業大学研究紀要』No.2 一九七二)

注 16 林屋辰三郎『かぶぎの成立』（推古書院 昭和24年）による。  
注 17 『編信濃史料叢書』第二十二卷（信濃史料刊行会 昭和54年）  
新編による。ルビは同書のまま。

注 18 吉田東伍『大日本地名辞書』（富山房 明治35年）  
注 19 『雍州府志』には河越三喜は寛政年中（一四六〇）一四六六）  
の人としている。この河越三喜の生存年代は、三帰翁が木曾の  
山中に隠れ住んだといわれる弘治の頃（一五五五）一五五七）  
より約百年以前である。三返の翁の伝承が信じ難いということ  
については貝原益軒の『木曾路之記』をはじめ諸書に見えるが、

注 3 掲出『千曲之真砂』には次のようにある。

又謡曲に作れる三帰の翁、飛雲寺の事、何れも慥かなる記  
録に見へず、いと不審也、烏丸殿の紀行にも、世諺さまざま  
まの来歴をいへとも信用しかたし、但景は類ひなきもの也  
と書たまへり、

注 20 天保五年 信濃国佐久郡白田の逸老 井田貞翁著（注3掲出  
『路原拾葉』下巻 昭和50年 所収）による。

（付記） 本稿執筆に当たって、臨川寺住職見浦宗山氏に種々御教  
示をいただいた。ここに記して感謝する。

（とりい ふみこ 本学教授）